日本リハビリテーション教育学会誌

第5巻 特別号2号 2022年

第16回 日本リハビリテーション教育学会学術大会

大会テーマ:国試脳を育むためのリハビリテーション教育学

日時: 2022年12月17日(土)

会 場:神戸国際大学 (住所:神戸市東灘区向洋町中9-1-6)

大会長:池田 拓郎(福岡国際医療福祉大学 医療学部 理学療法学科)

NPO:Rehabilitation Academic center (RAC)

The Society of Japan Rehabilitation Education

第16回日本リハビリテーション教育学会学術大会(神戸)

テーマ:国試脳を育むためのリハビリテーション教育学 2022年12月17日(土)

神戸国際大学(神戸市東灘区向洋町中9-1-6)

ZOOM 情報: https://zoom.us/j/96016469221 (8:45より入室可) ミーティング ID: 960 1646 9221 パスコード: kobe1217

開会: 堀本ゆかり(日本リハビリテーション教育学会)

9:05 特別講演 I 「国試脳を育むための科学的根拠」

福岡国際医療福祉大学 医療学部 理学療法学科 池田 拓郎・・・1 司会:国際医療福祉大学 福岡保健医療学部 理学療法学科 堀本 ゆかり

9:40 特別講演Ⅱ 『国試脳を育むためのテーラーメード型レシピと実践』

国際医療福祉大学 福岡保健医療学部 理学療法学科 鈴木 あかり・・・2 司会:国際医療福祉大学 保健医療学部 理学療法学科 小野田 公

- 10:25 一般演題 I (口述発表) 座長:国際医療福祉大学 小田原保健医療学部 和田 三幸
 - 1. リハビリテーション専門職のエゴ・レジリエンス、職業性ストレス、自己肯定感の関連 下関リハビリテーション病院 和多田 美紅・・・3
 - 2. 新人療法士における多職種連携能力と社会的スキルの関連性
 - 下関リハビリテーション病院 浅山 美穂・・・4
 - 3. リハビリスタッフにおける組織風土と専門職者行動の関連性の検討
 - 新小文字病院 福田 倫大···5
- 4. 理学療法士における批判的思考の認知度と批判的思考態度に関する調査
 - 東京品川病院 鴫原 良・・・6
- 5. リハビリテーション専門職管理者の経験学習プロセスの調査-学習支援方法の提案に向けて-
 - 緑成会病院 小林 昂将・・・7
- 6. 理学療法士の social skills に関する現状と課題 スコーピングレビューによる検討 国際医療福祉大学大学院 保健医療学専攻 医療福祉教育・管理分野 西舘 礼唯・・・8

閉会:池田 拓郎(福岡国際医療福祉大学 医療学部 理学療法学科)

特別講演I

『国試脳を育むための科学的根拠』

第16回日本リハビリテーション教育学会学術大会 大会長 福岡国際医療福祉大学 医療学部 理学療法学科 池田 拓郎

2022年の第57回理学療法士国家試験では、10,096名が合格し、79.6%の合格率であった。近年の合格率80%台を推移している現状から、多くの学校および養成校は、一人でも多くの出願者を受験につなげさせ、高い合格率を得るために協同学習、模擬試験および個別対応などに取り組んでいる。一方、絶対主義的な効果的な勉強法は未だ存在しないため、教員と受験者の経験則に基づいた対策を講じられている現状にある。このような絶対主義的な勉強法のない状況において、現時点で明らかにされている脳科学、教育工学および心理物理学などの研究成果を飛躍させず、取り入れることは、学生の記憶、注意、情動などへと働きかけるひとつの方略となるのではないかと推察する。

本講演では、誰しもが期待する絶対主義的な国家試験対策の科学的な勉強法の提案ではなく、科学的知見を踏まえ、私ならばこう勉強するという内容であることを前提として紹介する。さらに、脳の仕組みを理解して、国家試験に挑む学生の学ぶための脳(国試脳)の育み方を考察したい。

※国試脳:大会長である講演者が第16回学術大会(会期:2022年12月17日)のために作成した造語。

特別講演Ⅱ

『国試脳を育むためのテーラーメード型レシピと実践』

国際医療福祉大学 福岡保健医療学部 理学療法学科 鈴木 あかり

理学療法士養成校(以下、養成校)に入学した多くの学生は「理学療法士国家試験合格」を最終目標に入学し、学習に励む。しかし、近年、養成校の増加、少子化、大学全入時代など社会的な影響もあり、実際、学生の中には理学療法士になりたいという動機が低い学生、学習習慣が身についておらず学習の方法がわからない学生も少なくない印象をもつ。また、未来のリハビリテーション専門職を担う現在の学生は、Z世代と呼ばれており、社会情勢の影響も受け、生きるうえで大切にしたいことや働き方に対する価値観、得意・不得意も変化かつ多様化している。

このような今の時代を踏まえたとき、国家試験対策においても、多様化する学生の特性を理解し、国家試験対策をサポートしていくことが重要になる。一方、国家試験合格のハードルは変わらないとすると、多様化を受け入れながらも、国家試験合格ラインへ到着するというバランスを保ちながら、テーラーメードなサポートをしていくことが求められると考える。

私自身、まだ教員歴は浅いが、これまで国家試験対策に携わらせていただき、時代とともに変わるものあれば、時代が変わっても変らないものもあるように思える。本講演では、特別講演 I 「国試脳を育むための科学的根拠」も踏まえながら、(試行錯誤しながらではあるが)実際、国家試験対策としてサポートした経験を紹介し、今後の課題について考察したい。

【一般演題 1】

リハビリテーション専門職のエゴ・レジリエンス,職業性ストレス,自己肯定感の関連

和多田 美紅¹⁾ , 堀本 ゆかり²⁾ , 金子 秀雄²⁾ 1) 下関リハビリテーション病院 2) 国際医療福祉大学大学院 医療福祉教育・管理分野

【目的】

本研究は、リハビリテーション専門職(以下、リハ職)のエゴ・レジリエンス(以下、ER)、職業性ストレス、自己肯定感の関連を調査することで、ソーシャルサポート充実化の一助および職場環境改善や職場満足度の向上に繋げることを目的とした.

【方法】

本研究デザインは、質問紙を用いた横断的研究である。対象者は関連医療機関13施設に所属する理学療法士、作業療法士、言語聴覚士555名とした。方法はGoogle formsによるweb調査である。これらのデータを用いてER、職業性ストレス、自己肯定感の関連を調査した。内容は個人属性、仕事内・外のストレス内容について、ストレス解消法について、Ego-Resiliency尺度 日本語版(14項目)、職業性ストレス簡易調査票(57項目)、自己肯定感尺度(20項目)の計102項目とした。基本統計量を集計後、各尺度と個人属性の比較にMann-Whitney U検定およびKruskai-Wallis検定を実施した。ERを3群(低ER群、平均ER群、高ER群)に分類し、個人属性の比較に χ 2検定を実施した。またER3群と職業性ストレスおよび自己肯定感、ストレス3因子の比較にKruskai-Wallis検定を実施した。ERと個人属性、各尺度の関係性はSpearmanの順位相関係数を実施した。ストレス内容、ストレス解消法はテキストマイニングによる分析を行った。

【倫理的配慮】

本研究は、下関リハビリテーション病院倫理審査委員会により承認を得て実施した (承認番号:2022-3). 対象者に研究説明書にて研究説明を行い、webでの質問紙への 回答をもって同意とした.

【結果】

ERと個人属性の比較では性別,経験年数,ストレス解消法,適性 自己評価で有意差が認められた.ER3群の職業性ストレスの比較では低ER群が最もストレスが高く,高ER群が最もストレスが低い結果となった.ER3群の自己肯定感の比較では低ER群が最も自己肯定感が低く,高ER群が最も自己肯定感が高かった.ER群と職業性ストレス3因子での比較は高ER群が最もサポートが多かった.ERの相関分析は適性自己評価とは軽度の正の相関,自己肯定感とは中等度の正の相関,職業性ストレスとは軽度の負の相関を認められた.

【考察】

ERが高ければ職業性ストレスは低い結果となり、ERが高ければ仕事内で感じる職業性ストレスや、仕事外で感じる日常生活でのストレスを柔軟に対処し、ストレスを感じることなく過ごせている可能性が示唆された。ERが高ければ、自己肯定感も高くなり、ポジティブに物事を捉え、ストレスを対処できる力となる可能性が示唆された。

【結論】

ERや自己肯定感は職業性ストレスを低下させる要因である可能性が示唆された. ER や自己肯定感を高めるための支援体制や取り組みが今後の課題であると考える.

【一般演題 2】

新人療法士における多職種連携能力と社会的スキルの関連性

浅山 美穂1), 堀本 ゆかり2), 金子 秀雄2)

- 1) 一般社団法人 巨樹の会 下関リハビリテーション病院
- 2) 国際医療福祉大学大学院 医療福祉教育·管理分野

【目的】

本研究は、臨床1年目セラピスト(以下、新人療法士)における多職種連携能力と 社会的スキルの関連性を調査することで、新人療法士のスキルアップおよび卒後教育 の質の向上に繋げることを目的とした.

【方法】

対象は関連施設である24施設に所属する新人療法士(PT・OT・ST)264名である. 調査方法は、Google Formsを用いた横断的な質問紙調査とした. 内容は基本属性、臨床実習について、多職種連携について、多職種連携能力の尺度である地域基盤型IPW能力自己評価(17項目)・RIPLS(19項目)、社会的スキルの尺度であるKiSS-18(18項目)の計79項目とした. 多職種連携教育(以下、IPE)経験の有無で2群に分け、基本統計量を集計後、各尺度に対してMann-Whitney U検定を実施した. 続いて各尺度の関係性についてSpearmanの順位相関係数を用いて解析を行った. 最後に新人療法士全体に対し、地域基盤型IPW能力自己評価総得点を目的変数とした重回帰分析を行った.

【倫理的配慮】

研究への参加は自由意志によるものとし、回答の送信を持って本研究への同意を確認した。また本研究は下関リハビリテーション病院倫理審査委員会より承認を得て実施した(承認番号:2022-3).

【結果】

IPE経験の有無で2群比較した結果,あり群においては多職種連携能力および社会的スキルは高い傾向を示した。また、IPEの準備状況を表す指標であるRIPLS総得点と因子の一つであるチームワークとコラボレーションのみ、統計学的有意差を認めた。相関分析の結果、新人療法士全体においては地域基盤型IPW能力自己評価総得点とKiSS-18の総得点および各因子に中等度の正の相関を認めた。更にIPE経験あり群では新人療法士全体を上回る結果であった。重回帰分析の結果、決定係数はR²=0.520で、性別、多職種連携に対する自信、社会的スキルの2因子が影響を与えていた。以上の結果は、Stepwise法による分析でも同様の結果であった。

【考察】

IPEをカリキュラムの一環として学ぶことや臨床実習で積極的に多職種連携実践を学ぶことが重要となる可能性が示唆された。また入職後、臨床現場において多職種連携実践を行う上では、対人関係を構築するための社会的スキルが必要である可能性が示唆された。今後、卒後教育プログラムの見直しや新たな教育プログラムの構築を行うことで、新人療法士は早期より臨床現場で多職種連携実践が行えると考える。

【結論】

新人療法士においてIPEの経験は社会的スキルを養い、多職種連携能力を高める上で重要な因子の一つである可能性が示唆された. 多職種連携能力には社会的スキルが密接に関係している可能性が考えられる.

【一般演題 3】

リハビリスタッフにおける組織風土と専門職者行動の関連性の検討

福田倫大1), 堀本ゆかり2), 金子秀雄2)

- 1) 学校法人巨樹の会 下関看護リハビリテーション学校
- 2) 国際医療福祉大学大学院 医療福祉教育・管理分野

【目的】

本研究の目的は、臨床における組織風土と専門職者行動尺度との関連を調査しそれ ぞれの専門職が考える在籍施設の課題を明らかにすることで、今後の組織活性化に役立てることである.

【方法】

本研究デザインは,質問紙を用いた横断的研究である.対象者は関連病院である急性期病院・回復期病院の2施設に勤務するリハビリテーション科PT・OT・STの職員(急性期病院:69名,回復期病院:147名)216名である.方法はGoogle Formsによるweb調査である.内容は基本属性(11項目),組織風土についてOCS-12(12項目),専門職者行動について専門職者行動尺度(13項目),所属する施設の組織風土改善案を自由記載とし,計47項目とした.基本統計量を集計後,①組織風土を肯定的群(イキイキ型)と否定的群(シブシブ型・バラバラ型・イヤイヤ型)の2群に分け,各尺度に対して名義尺度をカイ二乗検定,連続変数をMann-whitney検定,②所属する施設の組織風土の改善案を自由記載にて行った.

【倫理的配慮】

本研究は、国際医療福祉大学倫理審査委員会より承認を得て実施した(承認番号:22-Ifh-013). 研究対象者に研究説明書にて研究説明を行い、webでの質問紙への回答を持って同意とした.

【結果】

組織風土2類型と各尺度を比較した結果,性別・年齢・養成校種類・経験年数・リハ職での転籍回数・自己の振り返りに有意差を認めた.所属する施設の組織風土改善案の自由記載では「~してほしい」という意見が否定的群で多く見られた.また意見がないスタッフは肯定的群で51.2%,否定的群32.6%という結果であった.

【考察】

組織風土2類型と各尺度を比較した結果から、組織として統率が取れて強制や命令的な指示がない中、スタッフは自分自身の内面を客観的・批判的に見つめることができているため、自律性に基づく業務遂行が出来るのではないかと考える。否定的群に属するスタッフは組織風土に対して改善案や意見を多く持っていることが示唆され、この意見に耳を傾けていくことが組織風土を改善させていく一つの方法なのではないかと考えた。

【結論】

組織風土は自己の振り返りと関連する.所属する施設の組織風土改善案に関しては 否定的群に属するリハビリスタッフが肯定的群と比較し意見を多く認め,否定的群の 意見は組織風土にとって重要であると考えた.

【一般演題 4】

理学療法士における批判的思考の認知度と批判的思考態度に関する調査

鴫原 良1)、堀本 ゆかり2)、池田 拓郎2)

1) 東京品川病院 2) 国際医療福祉大学大学院 医療福祉教育・管理分野

【目的】

当院理学療法士の批判的思考の認知度および批判的思考態度の特徴と活用状況を明らかにすることである.

【方法】

東京品川病院に在籍する理学療法士を対象に, google forms を使用した横断的調査を行った.調査項目は,基本属性(5項目),批判的思考態度尺度(33項目),批判的思考の認知度に関連する項目(1項目),批判的思考態度の活用状況に関連する項目(4項目)の計43項目とした.得られた52名のデータを統計的手法により分析した.

【倫理的配慮】

対象者には、説明文書にて研究の説明を行い、文書にて同意を得て実施した.なお、本研究は、東京品川病院倫理審査委員会の承認を得ている(承認番号:22-A-05).

【結果】

批判的思考を知っている者は7.8%であったが、未知群の批判的思考態度尺度の得点は、看護師の先行研究よりも高い得点を示した.既知群と未知群を比較した結果では、「探究心」において既知群のほうが有意に高かった.対象者全体から得られた批判的思考態度尺度の下位尺度の得点を因子間で比較した結果では、下位尺度の平均点の中で有意差が認められ、その中でも「探究心」の得点が高い傾向であり、次いで「客観性」>「証拠の重視」>「論理的思考への自覚」の順であった.批判的思考態度の活用状況に関する回答では、「探究心」と「客観性」において、50%以上の活用状況を示していた.

【考察】

理学療法士の批判的思考の認知度は低い結果であったが、批判的思考の認知度に関わらず、日々の理学療法業務を遂行する過程で批判的思考態度がある程度身につく可能性が示唆された.しかし、既知群のほうが尺度得点は高い傾向にあったことから、さらに批判的思考態度を高めるには、批判的思考に関する教育が必要であることが示唆された.批判的思考態度の尺度得点と活用状況では、「探究心」と「客観性」が高い傾向を示した.この背景には、理学療法士が対象とする対象者の拡大や多職種連携の実践が求められていることが影響していると考えた.

【結語】

理学療法士において批判的思考という概念の認知は十分でなかった.実際の臨床現場で活用するためには、批判的思考態度をさらに高める必要があり、そのためには、批判的思考を身につける教育が必要であることが示唆された.

本調査は、1 施設での調査結果にすぎず、理学療法士一般の状況を反映させたものではない、今後は、調査対象を拡大し、理学療法士の実態を詳細に把握する必要がある。

【一般演題 5】

リハビリテーション専門職管理者の経験学習プロセスの調査 -学習支援方法の提案に向けて-

小林昂将¹⁾ , 堀本ゆかり²⁾ , 池田拓郎²⁾ 1) 一般財団法人 多摩緑成会 緑成会病院 2) 国際医療福祉大学大学院 医療福祉教育・管理分野

【目的】

リハビリテーション専門職管理者(以下リハビリ管理者)を対象とし,各キャリアでどのような経験が自身の成長を促したと思われるか,また,そこから得られた教訓等を調査することとした.得られた経験と教訓から経験学習支援方法をまとめ,リハビリ管理者の人材育成支援の基礎資料の一助とすることを目的とする.

【方法】

Google formsを利用した無記名のアンケート調査に同意の得られた理学療法士,作業療法士,言語聴覚士の管理者87名を対象とした.内容はキャリア初期(1-4年目),中期(5-9年目),後期(10年目以上)において「特に印象に残っている出来事(経験)」と「そこから得られた教訓(学習)」を自由記述で回答する.分析は修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチに基づき,各職種,キャリアごとの経験と学習の回答結果をカテゴリー化した.得られた経験学習から経験学習支援方法を挙げる.

【倫理的配慮】

国際医療福祉大学倫理審査委員会の承認を得て実施した(承認番号:22-Ifh-019). 【結果】

アンケートの有効回答率は88.5%であった.リハビリ管理者は、キャリア初期に『患者家族との関わり』から「専門職に必要な知識・技能・態度」等を、中期は『管理業務』から「専門職としての葛藤」を抱えながらも「管理者に必要な技能」等を感じとる.後期では葛藤を感じていた『管理業務』から「管理者としての面白み」を見出すようになる.全期を通して『他者の影響』が多く「専門職像の形成」や「社会人としての行い」等を学習していた.

【考察】

リハビリ管理者は全てのキャリアで困難と感じる出来事があるが、それを、成果を上げるチャンスと前向きに捉えることや新たな課題に挑戦するために、自己研鑽をし続けていることがわかった。また、早い段階から管理業務を経験し、葛藤や難しさを感じながらも成長のチャンスと前向きに捉え、経験を重ねながら成長していく様子が伺える。リハビリ管理者はキャリアの過程で「患者家族のために」という考え方から「組織全体や社会がよくなるために」というように、与えられた職責を全うするため、葛藤や不安を感じながらも、専門職としてのキャリアを形成し、成長していく、そして、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士全ての職種に共通し各キャリアで多かった経験学習として『他者の影響』が挙がった。上司や先輩だけでなく、同僚や後輩、多職種や職場外の人と出会える機会を増やすことや分野や領域に関係なく、挑戦している姿や自己研鑽していることを見せていくことで専門職として管理者として成長につながるのではないかと考える。

【結論】

リハビリ管理者は、職責を全うするため、学び続けていることが明らかになった. 困難に直面するような経験から、それを乗り越えるための努力と上司や先輩、同僚や後輩

など様々な他者からの支援が重要と考えられる.

【一般演題 6】

理学療法士のsocial skillsに関する現状と課題 スコーピングレビューによる検討

西舘礼唯1), 堀本ゆかり2), 池田拓郎2)

- 1) 国際医療福祉大学大学院 保健医療学専攻 医療福祉教育・管理分野
 - 2) 国際医療福祉大学大学院 医療福祉教育・管理分野

【目的】

近年、理学療法士の質の低下が問題視されている。そのため、理学療法士養成校の卒業後も継続的に、自ら学び続ける必要がある。永野らは、理学療法学生の「社会的スキル」が学習意欲に影響を与えていると報告しており、自ら学び続けるためには社会的スキルが重要であるといえる。社会的スキルは、social skillsとも訳され、Gresham (1988) によるsocial skillsの構成概念では、対人行動や自己に関する行動、課題に関する行動を指す。本国でも多くのsocial skillsに関する文献が存在するが、social skillsの構成概念や理学療法士のsocial skillsが種々へ与える影響についての詳細な検討は少数である。

そこで本研究では、理学療法士のsocial skillsにおける知見を把握し、今後の理学療法士のsocial skillsに関する研究への足がかりとすることを目的とした.

【方法】

理学療法士のsocial skillsに関して、スコーピングレビューでの文献レビューを行った。文献検索には、メディカルオンライン、PubMed、CiNii Reseachを利用した。検索語は、スキルを「social skills」、「basic skills」とし、理学療法士を「physical therapist」とした。検索された文献の選抜は、スコーピングレビューのための報告ガイドラインであるPRISMA-ScRのフローチャートに基づいて行った。

選抜された文献を文献タイトル,著者,種別,発行年で分類し,内容の要約を行った. 【倫理的配慮】

本研究は、データベース上の文献を網羅的に調査する文献レビュー研究である.要 約の際に、誤訳が生じないよう慎重に翻訳するとともに、著作権には充分留意した.

【結果】

理学療法士のsocial skillsにおける文献選抜では、353件の文献が得られた.そこから本研究の趣旨とは異なる文献を除外し、最終的に16件の文献を選抜した.

選抜された文献から、理学療法士において、social skillsは感情労働で挫折せず、 労働への意欲やモチベーションを高め、キャリア形成を果たすことや、自立的に業務 を遂行するために必要な能力であるということが読み取れた。また、海外においても social skillsが自信や専門職としての資質向上に繋がったという報告が見られた。

【考察】

今回のスコーピングレビューでは、理学療法士のsocial skillsがどのような能力と関連しているのかという点や、理学療法士として働く上でsocial skillsが重要であるという点について分析を行うことができた、選抜された文献は本国から海外まで幅広く、social skillsが国際的に重要視されていることを示していると考える。本研究の結果より、理学療法士は知識や技術だけではなく高いsocial skillsを持って業務を行う必要があるのではないかと考える。

【結論】

本研究では理学療法士において、social skillsがどのように重要であるかという点については明らかにすることができた.しかし、social skillsの具体的な構成概念においては十分な結果を得ることができなかった.今後、social skillsの構成概念につ

いては新たな研究を行う必要性が示唆された.

編集長 山田 洋一 (理学療法士)

編集委員 高島 恵 (理学療法士)

神山 真美 (作業療法士)

鈴木 真生 (言語聴覚士)

寺田 佳孝 (教育学)

鈴木 啓介 (理学療法士)

植田 恵 (言語聴覚士)

編集: NPO 法人リハビリテーション学術センター 日本リハビリテーション教育学会

日本リハビリテーション教育学会誌

第 5 巻 Supple2 2022 年

2022年12月17日発行

〒173-0004

東京都板橋区板橋 1-11-7-901

日本リハビリテーション教育学会 事務局

URL

http://rehaac.org/professional.html